

第20回移住者インタビュー
『住田いちごは品質の高さが魅力』
住田町地域おこし協力隊 菊池 一晃 さん



菊池 一晃（きくち かずあき）さん
埼玉県深谷市出身

住田町「ストロベリープロジェクト」地域おこし協力隊
住田いちごの存続に向けて事業継承するため、いちご農家さんの元で研修されている。

－御出身は。

埼玉県出身で、大学生時代から宮城県仙台市に住んでいました。卒業後はそのまま仙台で不動産会社や建設会社に勤務してきました。

－住田町に移住されたきっかけは。

家族とともに、欲の少ない自然に恵まれた土地で、自然体で生きていきたいと思ったのが主なきっかけです。

現在、小学6年生と小学4年生(双子)の子ども、計3人の子供がいます。長い人生のうち、子どもたちと一緒に過ごせる時間のおよそ半分が過ぎてしまっているんだなと思ったときに、自分はこれまで仕事ばかりしてきて、一体、何のために子どもたちを育てているのだろうと疑問に思うようになりました。

勤務していたのはとても忙しい不動産会社で、取り扱うものは金額的にも責任もストレスも大きく、体調を崩した時期もありました。休日出勤もありましたし、休みの日も仕事の事ばかり考えていました。

もっと子どもたちと一緒に、ゆっくり過ごせる時間を増やしたいという思いが生まれ、今よりは時間的・精神的に余裕のある仕事に就きたいと考えていました。

都会にいと「人より少しでもいい生活をしたい」とか、収入が高くなると「もっと多く貰えるようになりたい」という、欲を欲で塗り替えるようなところがあって、このまま仕事だけ続けていても「欲にキリがない人生だな」という思いになりました。

そんなとき、転職先を探すために農業に特化した求人サイトを見ていて、住田町の「ストロベリープロジェクト」の記事を見かけ、かつていちご一大産地であった住田町のいちご生産を途絶えさせないという任務があることを知りました。いきなり一から農業を始めるのではなく、3年間の研修期間を経てから事業継承することができるとのことで、それで生活できればいいかなと思い、応募しました。

ー移住やいちご農家への転職について御家族の反応は。

特段反対はありませんでした。むしろ、いちごの話子どもたちにしたときには、「いちごいいよね！カワイイし、おいしいよね！」、「いっぱい食べられるんでしょ？」と目を輝かせていたぐらいです。

ー菊池さんは埼玉県出身ということでしたが、奥様も県外出身なのでしょうか。

そうですね。妻は宮城県気仙沼市出身です。ですので、妻の実家が近いのも、応募した理由の一つでもあります。

ー御夫婦お二人とも県外出身となると、移住する前は不安なども多かったのではないのでしょうか。

僕はどこでも生きていけると思っているので、北海道だろうと、沖縄だろうと「住めば都」と言いますし、自分が選んだ環境の中で最大限の力を発揮する事が大切だと思います。なので、僕としては全然不安に思いませんでした。

ただ、妻と子どもありきの移住でしたので、まずは子どもたちが田舎に対応できるかなとか、馴染んでいけるかなといった不安はありました。妻に関しては実家が近くなりましたので、ちょくちょく帰省したり、何かあった時でもすぐに対応したりできるので、安心感もあったと思います。

ー移動手段などはどうされていますか。

車移動が主です。仙台に約20年住んでいて、車も所有していました。仕事でも乗っていたので、運転は全く問題ありません。事前に調べていましたが、住田町は雪もそれほど多くないとの事でしたので、雪道も心配はありませんでした。

ただ、車の走行距離は以前より多くなりましたので、ガソリン代は高くなりましたね。また、都会ではペーパードライバーだった方が、車の運転に慣れるという点では、交通量も少ないのですごく良い所だと思います。そもそも車が無いと生活できないくらいに思いますが。

車生活になると、基本的にドア to ドアでの移動になりますので、実は田舎での生活は都会よりも歩かなくなり、運動不足になると思いますのでご注意ください。

ー以前と比べると新幹線の駅が遠くなったと思いますが、問題はなかったのでしょうか。

全く問題ないです。仕事をしているときはよく使っていましたが、今は乗ることがありませんので。埼玉に帰省するときも車で移動します。



《いちごの苗の手入れをしている菊池さん》

ー収入等は移住する前と比べてどうでしょうか。また現在の住まいは。

収入は以前より減りました。今は、毎月の給与と上限5万円の住宅手当が支給されています。収入が移住の目的の全てではありませんので、今の生活には満足しています。

移住するための住居を探す際、インターネット上では数件のアパートと、築50年ぐらいの戸建て数件しか物件がありませんでした。また、住田町の取り組みで、空き家を部分リフォームして賃貸している定住促進住宅や、町営住宅の紹介もされていました。

アパートは、部屋の割に賃料が高すぎでしたし、町営住宅は2LDK、戸建ては築50年で古すぎるし…と悩んでいました。私自身、不動産業界で働いていたこともあり、こういった場合には不動産会社へ電話で直接聞くほうが、掘り出し物件が出てくる場合があることを知っていました。大船渡の不動産会社から、そういえばと紹介されたのが住田町中心部にある戸建てで、築21年で6万円。間取りは5LDK。ここしかないと思い、すぐに決めました。仙台で築21年の5LDKだと、立地条件にもよりますが、10万円を超える位の家賃になると思います。それが住田町だと6万円。住宅手当が上限5万円支給されるので、実質家賃は1万円です。

他には、農家同士で仲良くなるとうたがき物があつたりします。特に野菜は今高いですからね。この間も、少し太めのねぎが3本198円で売っていて高いなど。

ー農家ならではのいただき物ですね。そういったいただきものは奥様も助かるのでは。

家計を預かる妻も不自由なく楽しんでいると思います。買い物は近くにドラッグストア、ホームセンター、個人経営のスーパー、コンビニがありますし、日常の買い物には苦労しません。週末にはまとめ買いで陸前高田や大船渡、遠野のスーパーで買い物します。

—お子さんが3人いらっしゃるということでしたが、お子さんは住田町での学校生活等は楽しんでますか。

小人数で、幼い頃からの関係性が出来ている中にポンと入っていきますし、移住してきてからすぐに学校行事が目白押しで、学校に慣れるまでは子供たちのケアが大変でした。今は学校行事も一段落して、子どもたちもやっと落ち着いたかなという感じです。

仙台の小学校は、平均的にはおそらく一学年で60~80人くらいかと思います。多い所は100人を超える所もあるので、こちらより生徒と学校との関係性が希薄だと思います。行事があっても積極的な子供は多くなく、「やりたい人がやればいいんじゃない？」と、そんな感じです。

うちも今までは自分から積極的に関わっていくことが少なかったので、「住田町では生徒全員が主役！」という仙台との違いが、多少ストレスになっていたようでした。

行事などに積極的に関わっていく中で、周囲と協調性をもって課題や問題を自分達で解決していくことや、行事を成功させるによって、今後の自信に繋がると思っていますので、子どもたちにとっても良い環境になったと思います。

—移住されてから家族で楽しんでいる・満喫しているもの等ありますか。

今までは子どものケアに注意していましたので、今のところは無いですね。これからです！来年は、気仙川でアユ釣りを一緒にやりたいと考えています。種山ヶ原でキャンプや星空観賞とかもいいですね。

また、地域の風習・文化を見て喜んでいます。子どもたちは、秋の学習発表会で『水しぎ』という風習があることを学びました。今月の24日に行われると聞いていたので、見てみたいと思います。

●『水しぎ』

毎年1月24日に行われる、住田町世田米に約200年前から伝わる火伏せの奇習。奇抜な格好に仮装した一団が木の棒で一斗缶を打ち鳴らしながら町内を巡回する。

—仕事以外で何かこれからやってみたいこと等ありますか。

小学校から高校まではサッカー、仙台に来てから県リーグでフットサルをやっていました。大きな怪我をしまい、県リーグは引退しましたが、復帰後は初心者でチームを作り、経験者として一からチームの育成・運営していき、県リーグ昇格戦まで昇りました。

6年生の子どもの同級生に、同じく移住してきた子がいて、その子のお父さんと初めて会ったときに「何かやっているんですか」みたいな話をしました。子どもがサッカーをやっているけど、住田のスポ少には野球とバレーしかなくて、クラブチームがある大船渡まで通っているとのことでした。人数が少ないから仕方ないですが、サッカーチームは作れないですね。

住田町で、個人参加型のフットサル教室でも作ってみようかなと。運動不足、ストレス解消になりますので、多少の需要はあるかもしれませんね。

—お仕事について。住田町の「ストロベリープロジェクト」に応募され、現在は事業継承のため研修中とのことですが、住田町や住田いちごについては以前からご存じだったのでしょうか。

初めて住田町を訪れたのは、応募する前の段階です。応募の判断材料として、住田町農政課の担当者から小中学校も含め、町内を案内して頂きました。それまでは全く知らなかったです。妻の実家が気仙沼なので、帰省時に観光で陸前高田市や大船渡市までは来たことがあったのですが、少し内陸に入ると住田町というところがあることは知らなかったです。

ーでは、住田いちごも…。

求人サイトの記事を見て初めて知りました。宮城県だと、いちご産地としては山元町や亶理町が有名ですが、住田町も以前はそんな感じだったんだろうなあという漠然としたイメージしかなかったです。

ーそうだったんですね。今、実際に育てられて、御自身でも住田いちごを食べる機会もあったと思いますが、菊池さんの思う住田いちごの魅力は何でしょうか。

研修先の菅野さん（菊池さんの研修先の農家）のハウスの中で、初めていちごを頂いたときは衝撃的でした。瑞々しくて、コクのある甘味と酸味のバランスが非常に良く、正直に今まで食べたいちごの中で一番でした。住田いちごは、品質の高さが魅力だと思います。

あとはこれをどう売るかだと思っています。将来は通販で直販することや、仙台・東京で売ること考えています。先月行われた住田町のクリスマスイベントのときに、東京でシェフをやっている坂東さん（[第7回移住者インタビューに出演](#)）とお会いして、「是非東京でも出しましょう」とお話をしました。

いちごを一番おいしい状態で召し上がっていただけるように、できるだけ株上完熟で出す方針です。でも、そこまで成らせると苗への負担も大きく、一つの苗に多くの実は着けられません。鮮度的にも朝に収穫して、その日のうちに発送するぐらいでないといけないと思っています。



《菊池さんの研修先の農家さんで育てているいちご》

ー農家として仕事をしていく中で心配なこと等はありますか。

もちろん、独立してやっていけるかは正直不安ですが、自分が選んだ道ですので、本気でやっていきます。これからさらに農業人口が減っていく中で、将来的には、いかに農地を集約できるかというところがポイントだと思っています。

あとは、夏の間は何をするかというところですか。菅野さんとも話しましたが、ハウス栽培の技術を活かして、キュウリやトマトがいいんじゃないかと話をされていました。

いちごの収穫は、11月下旬から翌年5月～6月が時期となり、収穫が終わると、翌年の苗を採苗し、8月下旬～9月上旬の定植まで育苗します。育苗期間中も忙しいですが、収穫期と比べると、多少は余力があるかなと思います。やろうと思えば他にもやれそうだなと。

ー最後にこれからの夢についてお聞かせください。

やはりまずは、いちご農家として独立することが目標です。

その先の目標としては、農業は6次産業化が進んでいますので、生産物を加工して販売していくところまで、自分でやっていければと思っています。まだ漠然としていますが、いちご専門のスイーツショップなんかできればいいなと。娘にバイトしてもらうのもアリですね(笑)。

また、今、研修先の菅野さん(栽培歴 20年)から技術を学ばせていただいています。菅野さんがそう呼ばれたように、いちごの事なら菊池に聞けと言われるくらいになりたいです。菅野さんの下には、県外からも農家や資材メーカーが視察にくるほどです。

これから農業もICT・IoT化が進んでいきますし、活用しなければならぬと思いますが、全ての作業を自動化・機械化はできません。機械が得意な部分は機械に任せますが、人にしかできない作業は、やはり人がやるしかありません。それはどんな産業でも一緒だと思います。そもそも機械を制御するのは人です。

例えば、いちご栽培では「苗の手入れ」は人にしかできない緻密な作業です。経験と勘が必要な、腕の見せ所でもあると思います。

菅野さんのように美味しいいちごを作る、いちご名人になりたいと思います。